

平成29年度 全国私立中学高等学校
私立学校専門研修会
次世代リーダー育成部会
実施報告

研究のねらい

新たな時代を拓く学校改革
～未来の礎を築くために～

少子化や経済不況、災害の影響などによって、学校経営環境が著しく変化する中であっても、学校が未来永劫的に存続・発展し、子どもたちの未来の礎を築くことは社会的な使命である。学校経営者には、「変化を読み取り柔軟に対応する能力」、「的確な決断を下すための知識」が求められており、将来的に学校経営の舵取りを任されることになる経営後継者に求められる役割と責任は益々大きくなっている。当部会では、自校の建学の精神、歴史を深く理解した上で、次の時代を見据え、自校と経営後継者の理想とする将来像を描き出すための考え方や視点を学び、その実現に向けて教職員と連携し自律的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを習得する。また、現職の学校経営者が理想や現実を語り、その経験から得られた教訓などを次世代に伝えるとともに、関係者とのネットワークづくりや情報交換の場とする。

本年度は、新しい時代を見据えた「学校改革」をテーマとし、はじめに日本私立中学高等学校連合会会長・当研究所理事長が、英語教育と高大接続改革など私学を取り巻く最新情勢について講話する。さらに、グローバル教育、イノベーション教育、リベラルアーツで21世紀型教育に挑戦する東京の中高一貫教育校のトップリーダーが、新時代の教育と私学のリーダー像について講演を行う。

午後からは、文武両道のたくましい進学校としてグローバル教育に先進的に取り組む【沖縄尚学高等学校・同附属中学校】を訪れる。同校は、2015年より日本の高等学校で初めて国際バカロレア(IB)日本語DPプログラムを導入し、その第一期生2名が2017年日本の高校生として初めてIB日本語DPを取得している。視察では、同校の副理事長を講師に迎え、グローバル教養人づくりをめざす改革への取り組み等についてメッセージを発信する。また、IB日本語DP授業をはじめ、沖縄伝統空手の授業、施設等を見学する。

ネットワーキングパーティ等の交流プログラムでは、リーダーが本音で語り合うネットワーク構築の機会を提供する。

会 期 平成29年12月8日（金）

会 場 **ANA クラウンプラザホテル沖縄ハーバービュー**（那覇市）
 【那覇空港より車で約10分・ゆいレール壺川駅より徒歩約10分】
 〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎 2-46 TEL 098-853-2111

参加者数 38名

- 参加対象**
- A. 次世代リーダー（次世代の理事長・校長等）を志す者
 - B. ニューリーダー（新任の理事長・校長等）
 - C. 次世代リーダーを育成する現職リーダー（現職の理事長・校長等）

基本日程

	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	30	30			20				30		30
12月8日（金）	受付 開会式	①講話	②講演 I	パワーランチ ・移動	③学校視察 【沖縄尚学高等学校・同附属中学校】 ＜授業視察、講演Ⅱ等＞				移動	④ネットワーキングパーティ	

☆プログラム

①開会式 講話

吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長
日本私立中学高等学校連合会 会長（第9期中央教育審議会委員）

②講演 I

- ◆演 題 「グローバル時代における教育イノベーション」
- ◆講 師 **平方 邦行** 工学院大学附属中学高等学校 校長

平方 邦行（ひらかた くによき）氏 プロフィール

工学院大学附属中学校・高等学校校長、学校法人工学院大学評議員・理事。一般財団法人東京私立中学高等学校協会副会長、東京都私立学校審議会委員、公益財団法人東京都私学財団理事の外、一般財団法人日本私学教育研究所副理事長、日本私立中学高等学校連合会常任理事などの要職を務める。文部科学省「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)検討・準備グループ」委員、同「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」専門委員を務める。

パワーランチ [円卓着席形式による情報交換・交流昼食会]

情報交換等による私学関係者のネットワークづくりの場。名刺をご用意下さい。

③学校視察 【学校改革・グローバル教育】

学校法人尚学学園 沖縄尚学高等学校・同附属中学校（沖縄県那覇市国場747）

～沖縄、日本そしてグローバル社会をたくましく生きていく人材の基礎をつくり、

グローバル社会で信頼され活躍できる資質を備えた強くて優しい文武両道の教養人の育成を目指す進学校～

1983(昭和58)年に高等学校を創立、1986(昭和61)年に附属中学校を開設した男女共学校。1983年に高等学校を創立、1986年に附属中学校を開設した男女共学校。グローバル・スタンダードとなっている文化力を身につけるため、沖縄伝統空手を必修授業としている。日米両大学へのダブル合格を目標とする「国際文化科学コース」では、国際バカロレアのデュアル・ランゲージ・ディプロマ・プログラム(DLDP)を2015年度から導入し、英語・数学・美術・TOKの授業を英語で提供している。2017年に本校IBプログラム第一期生2名が日本の高校で初となるIB日本語DPを取得した。

◇視察プログラム ※ 授業及び校内見学は、視察校の案内に従って行動して下さい。

- 授業視察〈沖縄伝統空手、国際バカロレア（IB）〉
- 空手授業・IBプログラムに関する質疑応答
- 全体会

視察校理事長挨拶 **名城 政次郎** 学校法人尚学学園 理事長・沖縄尚学高等学校 校長

講演 II

- ◆演 題 「グローバル社会を見据えた沖縄尚学の教育設計メソッド」
- ◆講 師 **名城 政一郎** 学校法人尚学学園 副理事長・沖縄尚学高等学校附属中学校 校長

名城 政一郎（なしろ まさいちろう）氏 プロフィール

1958年沖縄県生まれ。明治大学経営学部卒、同大学院経済学修士課程修了。大学時の恩師、ゼミ仲間、経済学との出会いにより、「思考力を限界まで働かせる習慣」と、「自分の言葉」を得た。研究者を目指して留学する予定だったが、沖縄尚学高校を開校した理事長・校長の父を補佐すべく、沖縄に戻る。1985年、同校で東大を始めとする難関大学受験指導。1991年同校副理事長・副校長就任。2004年渡米、セント・ジョーンズ大学客員講師（日本近現代史）を務めるかたわら、セント・メアリーズ大学教育専門職大学院で学ぶ。2009年同大学院博士（教育）取得。習得目標を明示した授業の導入や、空手の全生徒必修化など、グローバル社会を見据えたユニークな取り組みを行う。2011年沖縄尚学高校附属中学校長、同年沖縄大学客員教授に就任。2014年～2016年沖縄県私立中学高等学校協会会長。2012年3月「子供がやる気になる教育論」を著作。

質疑・意見交換／お礼の挨拶

④ネットワーキングパーティ 関係者間のネットワークづくりに資するための懇談夕食会

会場「**料亭那覇**」（琉球料理）沖縄県那覇市辻2-2-1 TEL098-868-5577（全員参加。懇談会費は参加費に含む）

☆研修会日程・プログラム☆

プログラム・内容は変更となる場合があります。

12月8日(金)

〔会場 [ANAクラウンプラザホテル沖縄ハーバービュー](#)〕

09:00～ 09:30	受付 【全体会場（午前）：2階彩海B】
09:30～ 10:30	<p>開会式 司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長</p> <p>☆開会</p> <p>☆開催地代表挨拶 諸見里 明 沖縄県私立中学高等学校協会 副会長</p> <p>☆主催者挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長</p> <p>☆来賓・役員・専門委員紹介／日程説明</p> <p>講話 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 日本私立中学高等学校連合会 会長（第9期中央教育審議会委員）</p>
10:30～ 12:00	<p>講演Ⅰ 司会・講師紹介 森 涼 次世代リーダー育成専門委員</p> <p>☆演題 「グローバル時代における教育イノベーション」</p> <p>☆講師 平方 邦行 工学院大学附属中学高等学校 校長</p>
12:00～ 13:00	<p>パワーランチ（円卓着席形式による情報交換・交流昼食会） 【昼食会場：2階白鳳A】</p> <p>※視察参加者はパワーランチ終了後、12時55分までに会場ホテル1階正面玄関に集合して下さい。</p>
13:00～ 13:20	移動（※貸切バス）
13:20～ 17:30	<p>学校視察 ※授業及び校内見学は、名札を着用し、視察校の案内に従って行動して下さい。</p> <p>沖縄尚学高等学校・同附属中学校（沖縄県那覇市国場747）</p> <p>【視察プログラム】</p> <p>◇授業視察〈沖縄伝統空手、国際バカロレア（IB）〉</p> <p>◇空手授業・IBプログラムに関する質疑応答</p> <p>◇全体会 〈司会・進行：視察校〉</p> <p>理事長挨拶 名城 政次郎 学校法人尚学学園 理事長・沖縄尚学高等学校 校長</p> <p>講演Ⅱ</p> <p>☆演題 「グローバル社会を見据えた沖縄尚学の教育設計メソッド」</p> <p>☆講師 名城 政一郎 学校法人尚学学園 副理事長・沖縄尚学高等学校附属中学校 校長</p> <p>質疑・意見交換</p> <p>お礼のことば 徳野 光博 次世代リーダー育成専門委員</p>
17:30～ 18:00	移動（※貸切バス）
18:00～ 19:30	<p>ネットワーキングパーティ 【会場：料亭那覇】（琉球料理）</p> <p>司会 事務局</p> <p>☆開会挨拶 中川 武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・所長</p> <p>☆来賓挨拶 名城 政一郎 学校法人尚学学園 副理事長・沖縄尚学高等学校附属中学校 校長</p> <p>☆乾杯 参加者代表</p> <p>☆懇談</p> <p>☆閉会挨拶 木内 秀樹 次世代リーダー育成専門委員長</p> <p>※終了後、貸切バスにて会場ホテルへ</p>

〈概要〉

本年度は、12月8日、「新たな時代を拓く学校改革～未来の礎を築くために～」を研究のねらいとし、ANAクラウンプラザホテル沖縄ハーバービュー及び沖縄尚学高等学校・同附属中学校において開催した。全国より38名の参加者があった。開会式では諸見里明・沖縄県私立中学高等学校協会副会長より歓迎挨拶が行われた。

午前中は、吉田晋・当研究所理事長がネットワーキング作りの大切さとともに、現在私学を取り巻く諸問題について講話を行った。続いて、平方邦行・工学院大学附属中学高等学校校長は講演Ⅰ「グローバル時代における教育イノベーション」で、世界の潮流と日本の学校教育の問題点を踏まえ、自校での実践例や海外での先進的な取り組みなどを通じて、これからの教育に必要なことや、方向性について語った。情報交換・交流昼食会パワーランチを挟み、午後からの学校視察では沖縄伝統空手、IBの授業（TOK・歴史）を視察、全体会では名城政次郎・学校法人尚学学園理事長の挨拶の後、IBのディプロマプログラムの生徒との質疑応答、名城政一郎・同法人副理事長より講演Ⅱ「グローバル社会を見据えた沖縄尚学の教育設計メソッド」を行った。講演では「どうにかする力（自己実現力）」と「信頼される力（社会貢献力）」を支柱にした学校作りが熱く語られ、参加者は食い入る様に聴き入っていた。最後に参加者はネットワーキングパーティで交流をさらに深めた。「プログラムの組立てが良く、効果的に研修できた」と好評であった。

開会式

開催地代表挨拶 沖縄県私立中学高等学校協会 副会長 諸見里 明



夏見本県会長に替わってご挨拶申し上げます。めんそーれー、ようこそ沖縄へ。沖縄県は日本で4番目に小さな町並みで、東西に1000kmの県域を持っている。そして、島々によって文化が異なる。先程の「めんそーれー」は「ようこそ」という意味だが、島によって言葉が異なっている。島言葉は今、絶滅の危機に瀕しており、子ども達は島言葉が分からない。島言葉の日や学校教育に島言葉の学習を導入するなど、努力が続けられているところだ。沖縄県は9つの世界遺産・自然遺産が登録されているので、滞在中に回って頂きたい。最後に、本研修会のご成功を祈念して挨拶としたい。

主催者挨拶・講話 (一財)日本私学教育研究所 理事長 吉田 晋



今、私学は色々な問題を抱えている。私が教育の世界に入ったのは26歳の頃で、42歳から理事長・校長をやっている。そのとき、一番助けてくれたのは私学の先輩方だった。周りにも相談する相手が沢山いた。そのおかげで、私立学校は自分の学校だけではないことに気がついた。

私立学校全体がどうやったら底上げできるのかを考えていかないと、例え自分の学校だけ良くても、私学教育は良くならない。東京は年収760万円以下の世帯には全て補助金が出る。私学助成もトップだ。それは、東京は高校240校、中学180校が、一つになれているからだと思う。我々が仲間と協力しながら私立学校全体のことを考える

動きをしてきたから、今の安泰がある。最近では、予算のことで、文科省から意見を聞かれるようになった。数の力で日本私立中学高等学校連合会は力を持てるようになった。

次世代リーダー育成部会を平成22年に始めたのは、これから学校を引っ張っていく人達が、協力して私学教育を良くしようという気持ちを持ってやっていって欲しいからだ。近藤先生の学校と私の学校は同じ層を対象にした学校で、普通の人には敵同士ではないのかと思われるが、そうではなく一緒に底上げをしてきた。

日本という国は戦後70年間教育で上がってきた国だ。来年度の予算の中で、今は何でも、ICTもそうだが、公立学校に配備した後で、私学を考えるという発想になっている。しかし、先進的に始めてきたのは私学だ。私学が公立より先に予算をとるという発想が大切だと思っている。

来年度の予算案の決定は今月の22日だ。私立高等学校等ICT教育設備整備費だが、ICTを活用した授業をしていかないといけないが、実際の整備率は非常に低い。今年度の予算は12億円だった。しかし、実際の要求は20億円以上あったため、県によっては実際には補助率通り2分の1ももらえないことがあった。そのため、文科省に倍額の24億円を要求してもらった。

今、就学支援金の増額が話題になっている。親は助かるが、私学に来るお金は増えない。公立は増える。公私立学校の教育費の格差があり私学の方が公立に比べ教育費がかかっていない状況がある。

新学習指導要領はイギリスのGCSEを真似るとか、アクティブ・ラーニングにするとか思考力を伸ばすと言われてきたが、単位名を見てどこがかわったのか判然としない。合教科という話もあったが理数探求（仮称）が3年生でしか履修できないなど、変化が極めて少ない。学修指導要領は太い柱をつくって細かな教科の部分は自由にして良いのではないかと考えている。外国では大きな教科のくくりでやっている。

高大接続についても、高校までに培った力をさらに発展させ社会に送り出す大学教育に注目している。高校教育においては学力の3要素を育成する。小学校、中学校はアクティブ・ラーニングが進んでいるのに高校がダメにしていると言われることがあるが、原因は大学入試だ。

英語の4技能試験も例えばTOEFLなど海外につながるものや日本の英検やTEAPがある。これらの資格は生涯資格もあるが、現在高校3年の2回をセンターが各大学に送付するとある。生徒には、高校3年までに英検準1級を持っている子もいる、その子が高校3年で、落ちたらどうするのか。また、すでに検定試験を利用している大学の入試では業者からの結果が直接送付されている。試験の費用についても世界共通価格なのだから、国が補助するべきだと思う。実施にはまだ問題がある。

人口が大都市に回帰している。子育てのために、幼稚園・保育園の無償化をしようとしている。しかし、それで上手くいくのか疑問だ。なにより、第3期教育振興基本計画については、教育振興の施策があるが、第1期・第2期の成果はどのくらいで、国民に熟知されているのか。そして、各施策の予算付けが全く書かれていない。私学助成については初めて、強い文言が書かれた。一方で、寄付金を得るための環境整備を書いている。日本は寄付文化がないので、高校以下は寄付がもらえる可能性は低い。

通信制高校の問題もある。通信制高校の通学制というのは何か、スクーリングをやって普段は通信でやる。好き勝手に単位を切り売りする。通学通信制にするなら別の制度を作るべきだと思う。日本の教育を守りたい、子ども達を守りたいと、私学が日本の教育を担ってきた部分を妨害して欲しくない。

これからも、教育のリーダーは私学だという思いでやっていきたい。来年以降も皆さんに参加して頂いて、ネットワークを作って欲しい。

講演 I

「グローバル時代における教育イノベーション」工学院大学附属中学高等学校 校長 平方 邦行



学校改革は何十年も前から言われていて、日々実行されていると思う。しかし、本当の意味で学校教育改革が実施されているかという「？」がつくところである。「皆さんはグローバル時代の私学教育はどうしていくのかについてどの様に考えますか。」今回は時間が限られできないが、こうした質問を隣同士で話してもらった方が一方的な講義よりも考えが深まる。隣の方や後ろの方と考えが違うことを理解できないと改革は進まない、日本の社会でも同じだ。予測不能な時代と言われるので難しいが、中高の学校が何を最低やらないといけないことはあるはずで、見当外れなことをしてはいけない。私立学校は追従主義や価値の定まったことをやっていけない。

150年の歴史をひもとくと、私学の原点は人の後追いではない。後追いでは存在価値がない。

先ず海外研修のことを考えると、海外研修は1970年代から行われ、50年の歴史がある。しかし、50年前と今の状況は違うので、以前と同じ内容でやっていないかを検討すべきだ。昔は多くの場合が国際理解教育で、今もそのように掲げている学校がある。ユネスコは一步踏み込み国際教育、グローバル教育としている。どこが違うのか。多様性が大切で、1、2週間でその国の文化が理解できるかは疑問である。本校では3週間、見ず知らずの家庭に入り、訪問先の学校に通って理解が深まるようにしている。同時に、留学生を受け入れる態勢を学校の中に作っていくことで、何週間ずつでも同世代の色々な国の人がいると、相手のことを理解できる。そのため、留学生の受け入れが大切になる。国際教育では海外の色々な問題、同世代や少し上の世代がどうやって各国の課題を解決しようとしているのかを知って欲しいと考えている。そのため、本校では留学前に数ヶ月の間Skypeを通じた遣り取りや勉強をして、現地に行ったときに活動ができるようにしている。それが世界とつながる学び方と思って行っている。しかし、こうした活動をするにも、ICT環境がないと出遅れてしまう。

これからの社会は、AIとの共生が欠かせない。AIの苦手なものは創造力だ。そのため、知識偏重から論理創造型の思考力を身に付けた創造性豊かな若者を育てていかないといけない。今回の大学入試制度改革は1点刻みの選抜試験をやめるところがスタートになっている。知識の量が学力だということを改め、結果だけではなくプロセスも評価する入試問題を作ろうと入試センターも取り組んでいる。社会から必要とされる人材を育てることも我々の使命である。論理思考型の学力を身に付けた若者を送り出さないと社会から必要とされなくなってしまう。

一方的に話すという形式が今まで日本で多く行われてきたが、今世界を見ると行われていない。今まで世界の学校を見てきたが、レクチャー型の授業は、2001年のベルギーの高校2年生の数学の授業を最後に見ていない。学びの形が変わる時期になっている。そのなかで、私立学校は1歩も2歩も先をいくように授業作り学校作りを進め、焼き直しの追従主義ではなく、質的に違う社会になるという自覚を持って教育に向かって行って欲しい。

社会から20年後に必要とされるスキルを一つ一つ予測することは困難だが、今後若者は未知の局面に次々と出会うことになる。そのとき、適切な判断ができる人間に育てることが重要だと考えている。今までの教育では、教師が答えを知っていて、答えに誘導していく授業行われていた。そのような授業では、答えが複数あるか、答えのない問題にはお手上げという状況が当然生まれうると思う。そういった授業を変えていかなければならない。

本当の意味での21世紀教育は、20世紀の影の象徴「第2次世界大戦」の世界中のあらゆるところに拡散している影響を解決

できることを根本には求められていると考えている。だからこそ、日本の自己都合で2020年大学入試改革をいつているわけではない。欧米はさらに進んでいる。現在の高大接続改革を私はグローバル高大接続改革と言った方が良いと考えている。今、改革できなければ、日本にとってはかなり厳しい状況がまっている。

二つの新しい大学教育を紹介する。一つは、ミネルバ大学。2014年にサンフランシスコに開校したが、キャンパスを持っておらず生徒は世界7都市を移動してオンライン授業を受けるため、全寮制でICT環境を作り教育活動を行っている。合格率は2.8%で、2017年は日本の高校生が3人合格している。学校も知らない、教師も知らない、そういうところに目を向けている高校生もいる。グローバルイマージョンがこの大学の基本コンセプトだ。英語イマージョンで授業しているわけではない。

もう一つ、ミッションUという一年制大学だ。この大学には授業料がなく、学費は就職して年収が5万ドルを超えたときから、給料の15%を払えば良いという出払いのシステムを採用している。それで入学希望者が殺到した。中身を見るとかなりのベンチャー企業が入っており、ハーバード大とかスタンフォード大に属する専門家がカリキュラムを作ることに関わっている。

これらの大学教育は何らかの形で手本にも脅威にもなる。脅威になる前に手本にしないとイケない。グローバル時代の私学教育の変化をどう考え、自分の学校をどうするのか。世界を見ても教育の転換点の最先端にいるという自覚を持って欲しい。

先程、吉田理事長は助成金のことにふれていた、授業料と助成金が資金のほぼ100%、しかし、今後同じようにいけるかという難しいと思う。企業や財団や個人から寄付を集めることができないのか、考えていく必要がある。

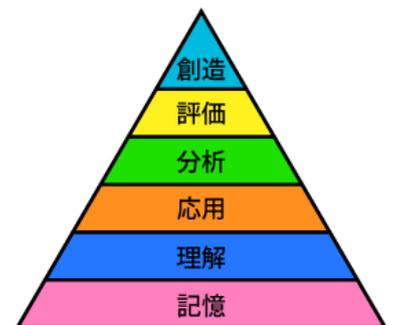
日本の教育は今まで全て輸入で、根本的な部分の輸出はない。日本の教育は欧米の教育の輸入で作られている。しかし、今は世界から生徒を集められる教育を行うことが私立学校に必要なではないか。なぜならば、今後、世界からの疎開先として比較的安全な日本が選ばれる可能性がある。そのように考えると、世界の疎開先として価値ある教育、国際標準的な教育をやらなければならないだろう。

2013年から本校では改革に着手している。三つの柱としてグローバル化、イノベーションとしてのICT化、リベラルアーツのためのPBL、PIIを展開している。IBの精神・思考を取り入れ、多言語・多文化を意識した教室を作った。今年度4月に中学三学年がそろい、いよいよ高校に移行していくところで、日本の中のことだけやる教育は違うと教職員に話して進めている。ヴィゴツキーの最近接発達領域やブルームのタキソノミーを研究した。

ブルームのタキソノミーは学習の分類として活用している。現在、日本の学習指導要領は下から4段階目までしかない。アクティブ・ラーニングをやらないと一番身に付かないのは、5番目と6番目だ。公立で上のところだけやるのは難しい、欧米では上の4・5・6番目をやっているから先進的になっている。教える側、教わる側の線引きをするのではなく、ともに学んでいく、ともに学習者だという意識で進めている。2年の間に思考コードを作り、試験や行事に使い、アドミッションポリシーに活かしている。思考コードでは、9つの枠を作りA1～C3まで、今授業でやっている分類はどこなのか、しっかり意識をしようとしている。常に段階的に進めていくわけではなく、最も低いレベルのA1から必ずスタートするわけでもない。高偏差値ではなく、多角的に子ども達の才能を活かしていこうとしている。様々な考えを形として共有したり、議論したりすることを長期間つづけていくことで、創造性を身に付けていく。

受験生も我々もどうしても人気の最先端校や先鋭校が気になる。これはしかたないが、突出する尖った学校を作るのが私学には必要で、一歩、海外に軸足をおくと、海外から注目される学校になるのではないかな。

最後に、私立学校法の改定が行われているが読んだことはあるだろうか。定款を読んでいるか。私学は株式を持っているわけではないので、無防備では簡単に乗っ取られる可能性がある。もう一度読まれた方が良くと思う。



パワーランチ

昼食を取りながらの交流会で、打ち解けた雰囲気の中、交流を深めた。名刺の交換や情報交換などネットワークを広げる会となった。



学校視察

【沖縄尚学高等学校・同附属中学校】



集合写真

〈空手の授業についての説明と質疑応答〉



●空手の授業について説明を受ける参加者。

空手の授業について説明を受けた後、空手の授業とIBの授業（TOKと歴史）を視察した。

説明：空手の授業は通常は三つの流派に別れて、先生が指導している。本校の空手の先生方は沖縄県空手道連盟から派遣される先生方にプラス1名の先生で行っている。プラス1名の先生は高校から入学した生徒（外進生）を対象とした授業を行っている。4流派の先生方にしっかり教えて頂いて、我々体育科はサポートについて出欠確認や忘れもの確認など、空手の先生方が指導しやすいようにしている。空手の授業は体育の授業として陸上・球技とならんでやっている。体育の授業中に武道として空手の授業が含まれていて、週1回空手の授業に中学1年生から取り組んでおり、入学当初、小学校で経験した生徒も全て白帯から始めて、年に2回の昇段審査会（中学1年は年1回）で昇級していく。学年毎に目標を定めていて、中学1年で5級、帯が緑になる。中学2年で3級、中学3年で2級を目標級にしている。高校生で初段、中には2段までとる生徒もいる。中学まではどんなに上手くても1級までしかとれない規定が空手道連盟の規定にある。昨年は高校生在校生のうち610名の段位取得生がでた、年々段位取得者が増えて行った。現在中学が約850名、高校生が約1100名ほどである。

Q：体育のコマはどうしているのか。

A：週に1コマが体育、1コマが空手、1コマが保健だ。昨年度、610名の昇段者が出たが、1回目の昇段審査7月、2回目を2月頃、高校1、2年を主体としてやっている。昇段試験は沖縄空手道連盟の先生12名にお越し頂いて朝から午後まで行っている。空手道連盟の先生12名が厳正な審査をして頂けるので、他に行く必要が無くできる。講師の先生方も審査員をされているので、普段の授業から審査でどのようなことをしているのかを教えてくださいながら取り組んでいる。そのため実力が上がっている。

Q：空手部は別にあるのか。

A：空手部は別にあり、今年度、全国大会に男子が出場、組み手で女子が全国出場した。中学で空手を経験した先生がいて、チームのコーチをしている。授業で生徒に中心で教えているのは連盟からの先生でサポートのみ。また、空手には形と組み手があるが、授業で教えているのは形のみで、組み手を行いたい生徒は空手道部に入部している。空手の授業は、副理事長がアメリカでの留学先での経験を元に沖縄の文化力の一つとして取り入れたいとして2007年の9月から始まった。来年で11年目になる。当初は空手道連盟の先生方は週1回の授業で道場に通っている生徒だけではなく、空手には余り興味のない生徒を含めて指導している状況であったので、当初は50名黒帯ができればお祝いものだと言われていた。しかし最初に黒帯が出たのは2年目で3名、あっという間に現在の610名合格までになった。

〈全体会〉

〈IBについて説明、質疑応答〉



●IBの授業を視察する参加者

IBプログラムについての担当教諭（国語科・英語科）からの説明と質疑応答、IBコースの生徒からの発表を行った。

説明：2015年に日本語・英語のデュアルランゲージプログラムの認定を受けた。それまでは文学以外は英語で行っていた。昨年1期生が卒業し、女子2名がディプロマをとり、1名はハワイの大学に、もう1名は慶応大学に進学した。この2名の受験時はバカロレアのディプロマが決定前であったので、IBのスコアを用いての大学進学ではない。1名はバカロレアの成績が出た後に、IB入試ができる鹿児島大学にチャレンジして、そこも合格した。しかし、結果的にハワイのほうに進学した。今

日来ている3名の生徒は、11月に全ての試験が終了し、来年の1月6日にIBの本部から試験の結果の通知がくる予定だ。IBの生徒は高校1年が23名、高校2年が23名、高校3年が15人、全61名在籍している。IBクラスは25名定員で募集をしている。

Q：先生側の準備や日常以外の授業とはどのような調整をしているのか。

A：本校のIBを担当している教員はすべてIBのみを担当している。1期生のときは1学年だけであったので、他の授業も担当していたが、それ以外はIBにかかりきりだった。IBの予習にかかる時間は時間・量ともに通常の授業に比べ多くなると思う。

例えば文学では、13の文学作品を選び、授業で1冊ずつ丸ごと批評していく。作品は教師側で選べるので、若い時分に読んで感動した作品などを取り上げることもあるが、教える際にマニュアルも教師用の資料もないので、教師も一つ一つの文学作品を読み込んで、様々な文学批評の方法を再度勉強しなおしたり、大学の紀要論文などを読んだり、文学批評のあり方を模索して授業をしている。そのため、かなり準備時間はかかるが楽しい。

Q：準備中は先生がIBのための資格をとったり、シラバスを出したりしたのか。また、先生は立候補してこのコースの担当になったのか。

A：資格に関しては東京学芸大学で、ワークショップを2日間受けて、資格を得た。シラバスの提出も行った。指名があって担当になった。

〈生徒より報告〉

生徒A：自分は理系のコースが好きで、国際科に入ったのはIBという進んだコースが受けたかったからだ。私達は6科目を履修する。理系科目が好きでも、アートや文学など文系教科も力を入れてやらないといけない。IBではIA（Internal Assessment）という論文を各教科で書き、また、EE（extended essay）というhigher levelで履修しているもので、授業内容を越えた論文を書かないといけなかった。こうしたゼロから新しいものを作ること、アートだと自分の感情や思いや考え方を芸術作品として作ることが課せられる。ゼロからものを考えて作り出す、表現する力はIBのカリキュラムを通して得られたことだ。普通の日本の高校の授業では知識を吸収するだけに止まると思う。しかし、IBを履修したお陰でこうした、自分の中にあることを表現することがスキルとして身に付いた。

生徒B：最初からIBに入りたいと思って国際科に入った。私はアートと文学の授業に興味を持った。ただ、本を読んで、質問に答えるのではなく、文学批評を行うことが面白かった。この手法を他の授業にもあてはめたり、勉強することができたりするのが良かった。IBでは授業同士のつながりが、TOK等を通して、一つの授業で得られたことを他の授業にも活かすことが面白かった。論文などを自分の苦手な理系の科目で行うのは大変だったが、授業の中で、考え方やエッセイの書き方を学んだ。他の授業を通して学ぶことができたのは貴重な経験だった。

生徒C：高校からの入学でIBを履修した。楽しかったことは主体的な学びだと思う。自分から学ぶ姿勢がIBの特徴かなと思う。このことは難しいことでもあった。一番大変だったことはセルフマネジメントだと思う。先生に何をやれと言われてやるのではなく、目標を達成するために、何をすべきかを自分で決めないといけない。指導側としては、生徒に何をやれと言わないので、楽なのかなと思った。（一同笑い）

Q：定員25名で、担当の先生は何人か？

A：9名。9名で間に合うが、一人担当1科目なので、病気等のときに代行がきかない。そのため、各教科2人くらい準備していると思う。

Q：IBの結果は1月だが、推薦は無理なのか。

A：デュアルランゲージなので、この生徒たちは一条校の卒業資格も得ているので推薦やAOなどが受けられる。ただ、問題はスコアの発表は1月なので、多くの国立大学は予測スコアで出願し、万が一、結果ディプロマが取れなかった場合は、出願したいが取り消される。スコアが出た後の入試を出してから出願に変えられないかといっているところだ。また、本コースの特徴としては、海外と日本の大学の両方に出願することが入学の目標にしている、海外と日本の大学の両方を受けて、選ぶという形になっている。

理事長挨拶 学校法人尚学学園 理事長・沖縄尚学高等学校 校長 名城 政次郎



この度は素晴らしい先生方の集まるこのような研修会を本校で開催して下さい本当に感謝している。

学校訓、校訓というものがある、この学校訓の理念を実践する人を作るということ、私はいつも思っている。一部の人は学校訓というのを形式的に言ってるにすぎないと思っている。本校では中学も高校も朝・夕の朝礼、終礼で学校訓を斉唱する。「暖かみ、厳しさ、知性を身につけ、感謝と奉仕の心を実践します」「怖れず侮らず気負わずやるべきことに取り組めます」この二つ。生徒も先生もやるべきとやるべきでないことが分かる人間にならないといけないし、また、この理念が日常の行動に感じ取れるような人間になって欲しい。そのためにはバランス感覚がある。どの程度まで親切にするのか、どの程度まで厳しくするのか。教職員も人間力を磨かなければ、人間だから、とんでもないことを言ったりしたりすることもある。だから、普段から人間力を養成するために、私どもは気を配って頑張らなければならない。そのようにいつも考えている。本校では職員会のときも全員立って学校訓を斉唱する。先生方はこれからも素晴らしい学校をつくっていかれると思う。釈迦に説法かもしれないが、私の考えの一端を述べさせて頂いた。

講演Ⅱ 「グローバル社会を見据えた沖縄尚学の教育設計メソッド」

学校法人尚学学園 副理事長・沖縄尚学高等学校附属中学校 校長 名城 政一郎



グローバル社会の教育需要に応える教育システム、今の社会が教育に何を求めているのかというのが、沖縄尚学の一番重要なポイントになる。それを常に測りながら教育システムを作り変えてきた。グローバルに通用するというのを追い求めていたら、本質を追い求めていたということに気がついた。どうにかしなければというのが私の体験で、いつもどうにかしなければというものに追いかけ回されてきたというのが本音だ。その中で普遍的な教育需要があると確信してカリキュラム化している。グローバル社会の教育需要に応える、グローバル教養人という言葉が沖縄尚学では使っているが、世界中どこにいても教養人として見なされる人間を作るカリキュラムを設計している。そのようなグローバル教養人を作る学校をグローバル進学校と呼んでいる。それには、多様性と統一性のバランスを取っていくのが大切だ。グローバル化が進展している中で、多様性を高めるのは簡単であるが、考え方、文化の違う人達に同じルールを守ってもらうのは、非常に難しい。そこが世界の問題になっているところだ。

1983年の開校時、理事長がそれまでの予備校の実践に基づいて、沖縄高校を引き継いで始まった。当時、沖縄には現役で東京大学に入った生徒がいなかった。難関大学に進学する習慣がなく、学校が進学を勧めることは、長年タブーだった。理事長が沖縄尚学を作ったときの目標は国内大学に進学するという事だった。4期生から東京大学の現役生から出て、大学入試に関しては実績を出した。バブルがはじけてからは、国内外の大学を目指すようになった。国際文化コースもこの影響で作ったコースだ。

「どうにかする力」これは理事長が開校当初から使っている言葉で、これを私なりに解釈し概念をつくって本校の目的にした。これが人間力推進型進学校である。そして、2004年から2007年までアメリカのセント・ジョーンズ大学で教えながら勉強して帰国後、グローバル社会の教育需要に応えようと、グローバル教養人の育成と国内外大学進学を現在の社会の需要だと考えて、グローバル進学校を目指している。必ずしも、保護者の要望が、社会の需要だとは思っていない。今の子ども達が10年後、20年後大丈夫かなと考える教育をやっている。

社会が大きく変化し、社会で必要とされる人材が変わり、教育が変わる。教育が変わると教育によって新しい人材が育ち、新しい社会が生まれる。これが繰り返される。教育が変わるには非常に時間がかかるので、人材が変わったな、生徒達が20年後に苦勞するなと思ったら、教育を変えなければならないと考えてやってきた。結局、沖縄尚学が求めてきたものは、日本の中で、日本に帰属意識を持った、日本に根付いたグローバル教養人を育てていくという方向に変わった。グローバル化で、教育には社会の変化で変わる部分と変わらない部分がある。社会の変化に応じて変えないといけない部分は、例えば、科学技術に係る部分だ。40年前パソコンを使える中学生はいなかった、ところが、今はだれでも使える。科学技術的な部分を教育で変えるのはとても簡単だ。しかし、人間的な部分を変えるのはとても難しい。もう一つは、時代が変わろうが、場所が変わろうが、変えてはならない資質がある。これは、時と場所を越えて通用する資質。グローバル化で必要とする人材を考えていくと、社会が変わる度に教育を変えていくと大変なことになると感じる。

「何故学校に通うのだろうか」この単純な質問から始まった。どの職業に、どの場所で就いても、大丈夫な資質はないだろうかと考えたとき、本質的な資質が二つあることに気がついた。一つは「どうにかする力」、どんな困難に遭遇してもどうにかする力、自分の得意を活かして、自分を幸せにする力「自己実現力」。もう一つは信頼される力、人を安心させ、喜ばせ、幸せにする。これを「社会貢献力」と呼んでいる。「自己実現力(どうにかする力)」と「社会貢献力(信頼される力)」は時と場所

を越えて通用すると考えている。「教育の究極の目的は何ですか」と言う問に対する答えは「自分の得意をみつけ、得意を活かし自己実現し、社会貢献するためである」となる。教育の究極の目的は「自己実現」と「社会貢献」であると考えている。

目的を達成するためには目標が必要になる。目標は時と場所が変わると変わる。沖縄尚学の場合は勉強、これは教養と言っているが、大学進学のための勉強だ。これが、いつでもどの時代でも、教育にないといけないかという点から分らない。異世代間で帰属意識を共有するためのボランティア活動と異文化間で帰属意識を共有するための異文化交流活動は倫理観につながると考えている。そして、沖縄伝統空手道、これは文化力と呼んでいるが、どの国でも必要かという点から分らない。英検、これはコミュニケーション力だ。沖縄尚学の教育目標である教養、倫理観、文化力、コミュニケーション力を達成するために、生徒達は必ず勉強、ボランティア活動・異文化交流活動、沖縄伝統空手、英検をやる。我々が何かを必修にするときには、2000人の生徒全員がやるので、彼らが一生懸命やって、後からあれは時間の無駄だったと思うようなものは絶対にやらせていない。必ずやったら、生徒は良かったと思うということを事前に生徒にも父母にも説明している。「自己実現力（どうにかする力）」と「社会貢献力（信頼される力）」をつけていくのが、沖縄尚学の教育になっている。

次に、組織の発展段階については、どんな組織も赤ちゃんの時代があり、子どもの時代があり、大人の時代があり、年をとって減んでいくという組織のライフサイクル理論を、そのままと組織が減ってしまうので、作り変えた。第1段階では職人的カリスマ創業者が創業して組織を立ち上げる。はじめは小規模で経営者が全て分かっている、全員で目標を共有している。しかし、人を増やしていくと、目が届かなくなり、フリーライダーが必ず出てくる。家業から公の業に変えていく必要がある。経営者が全ての判断をする形から、使命と目標を明示して、それぞれが軸を持って行動していくという体制を作る。これが第2段階で、「人から人」から「システム」へと呼んでいる。「システム」は、一定のルールに従って動くことと成果がでる仕組みを指す。そして第3段階、管理者と部下のチーム形成、それぞれの部署にチームができて上がる。そのチームが信頼感を持って仕事をできるような態勢、管理者と部下の信頼感を醸成するといったチーム養成システムの構築と定着である。第3段階が整えば発展のサイクルにのっていける。第4段階、創造的破壊発展。シュンペーターという経済学者が、今までやってきたことを新しいものに切り替える、これを創造的破壊（イノベーション）と呼んでいる。イノベーションには、イノベーターが必要になる。イノベーターに絶対必要な意識があると私が考えているのは、帰属意識である。自分の組織を最優先で考える人間がイノベーションしないと、良いアイデアがある外部者にイノベーションさせてしまっても、上手くいかない。そして、経験・専門性・ヴィジョン・思考力が必要だ。自分の思考力を200%使うくらいの思考力が必要になる。もう一つの方法は、少し安全で、社会で成功したイノベーションを活用することである。イノベーションが成功すると社会貢献主体への発展と呼んでいる第5段階に行く。我々の学校でも最初に何を目的にして何を目標にしてやってきたか、それを切り替えるときに新しい教育需要に応えるという組織になる。発展する組織は第3段階を確立させて、第4段階と第5段階を繰り返すというふうには私に考えている。大事なことは第3段階までをしっかりと作れば、あとはイノベーターが出てくれば社会の教育需要が変わったときに、イノベーターが上手くやって次の段階に移れる。発展する教育組織の設計で、第3段階が終了した証がある。それは、普遍的な教育目的・理念と時代と場所が変われば変わる可変的な教育目標、そして普遍的な教育システム、普遍的なチーム養成システムで、これらが揃ったとき、時と場所を越えたどんな教育需要にも対応可能な組織になる。

可変的な教育目標も時と場所によってかわるが、沖縄尚学が何かを当たり前にするときに、プロジェクト24、プロジェクト30のような、プロジェクトを組む。教育は特別な指導者が特別な生徒をつかって、特別なことを成し遂げるといことは、嬉しいことだが、これは教育の成果とは思っていない。誰がやっても、同じような成果が出るシステムができたとき、当たり前になったとき、習慣化したとき、これが成功だと考えている。沖縄尚学の教育目標である教養、倫理観、文化力、コミュニケーション力の達成を通して「自己実現力」と「社会貢献力」を育てていくのが沖縄尚学の教育である。今までは隠れカリキュラムと呼んでいたが、2018年度からピーター・ドラッカーを読みなおして、隠れカリキュラムよりも顕在化させて、生徒も教員も全て意識させて動いた方が良く判断し顕在化させた。

「自己実現力」「社会貢献力」を育てるための「自己実現の公式」と「社会貢献の公式」の二つの公式がある。まとめて「人間力養成システム」と呼んでいる。自己実現の公式について、先程ご覧頂いた空手に基づいて説明する。「どうにかする力」を養成するためには「良い目標」が必要になる。「良い目標」は「三方よし」の考え方でそれが実現したときに、自分も嬉しいが周りの人も喜ばせる、自分だけが嬉しくて周りの人が嬉しくない目標は「良い目標」にならない。空手で有段者になる、黒帯になるというのは、本人が嬉しい、両親も嬉しい、私や先生方も嬉しい。社会から見るときも空手の黒帯を取ることを喜んでくれると考えている。しかし、簡単に達成できる目標では「どうにかする力」が育たない、絶対に難しくなくてはならない。空手の黒帯を取るのはかなり難しい、やるべき基礎をやりきるとい体験を強いられる。昇級・昇段試験を受けるために体育館の前に並んでいる生徒達の姿は、緊張そのものだ。何百回も形の練習を行って、頭が真っ白になっても動くまでになっている。今の沖縄尚学の生徒のうち中学から入学している生徒の80%は黒帯を取っている。初段か二段だ。これで、やりきる体験、成長体験、できないことができるようになる体験、分からないことが分かるようになる体験、人に勝つのではなく、自分に克つ体験をする。そして、どうしても必要なのは勝負の場、緊張する場だ。やりきった基礎を緊張する場を出し切る体験、このプロセスを何回も何十回も繰り返していくと、知らないうちに、「どうにかする力」が付いてくる。ただ、忘れてはいけないのは、「成功」というのは成長が成功で、例え成績がビリであっても、前よりもできないことができるようになったとき、これは成功だ。ところが、逆に席次が1番であっても、何も努力せずに1番をとった、これを成功とは呼ばない。基礎をやりきった人間は、自分は本番でできるはずだという期待を持つ。その期待のことを本物の自信と呼んでいる。形をやりきって

いない生徒がああプロの審判員の前に立つと、とんでもないプレッシャーを感じることになる。もう一つの「信頼される力」の一番目は、まず自分で自分を信頼できる人と考えている。例えば成功したときは自分を信頼し、失敗したときは自分を信頼しない、ということになると大変なことになる。自分のやるべきことに対してベストを尽くそうとする人が、信頼できる人だという風に考えている。やりきる力から本物の自信につながり、どうにかする力がある人は自分から信頼してくれ信頼してくれと人に言わなくても、自然に人が信頼してくれる。信頼される力には基本的な価値観・目標を共有することがスタート地点になる。どうしても、目標を共有していないと、雑談はできるが、本当のコミュニケーションが取れない。本当に何かを達成しようとしたとき目標を共有した集団でないと難しいと考えている。まずは、何が正しくて、何が間違っているのか、それに基づいた目標をしっかりと共有して、役割責任をしっかりと分担し、ルールを共有をして、役割・責任を遂行する。これによって倫理観がお互いにあるのだな、ということを出して言わなくても学ぶ。そして、信頼感が生まれ、安心できる仲間だということ意識が生まれる。先程、集団演舞をやっていたが、生徒達は「演武大会で優勝する」目標を持っている。それには一人一人が頑張らないといけぬ。フリーライダーが一人でもいると優勝はできない。全員が頑張り、本番に臨み、勝ったり、負けたりする。勝っても、負けてもこのプロセスを共有した子ども達は信頼感が歪むことはない。

先程の普遍的なチーム養成システムは働く人の「自己実現」と「社会貢献」を可能にするチーム養成システムでもある。責任を分担することがとても大事で、自己実現と社会貢献の公式で目標達成に持っていくようにする。セルフマネジメントシステムと言っている。もう少し説明すると、私達を自発的に目標達成に向かわせるシステムで、動機付けとなる二つの要因がある。一つは専門職、我々教員はチームの一員としての専門職、弁護士や医者とは違うのは、弁護士、医者は成功・失敗は全部自分の手柄・責任になる。しかし、教育はチームとしての手柄・責任にしかない。そこを自覚する。もう一つは、チームの目標に貢献したいという気持ち。この二つが動機付けとなって自発的に目標達成に向かわせるというものだ。それを行動に移させる効果的な方法があって、それが生徒へのアンケートだ。「〇〇先生は授業の目標を共有しましたか」「この先生の説明で共有することができましたか」普通にやっている先生からするとこのアンケートは何の間違いも生まない。しかし、上手にできない先生にとっては、生徒に伝わっていないことが分かる。そうすると先生は修正する、これが習慣化し、当たり前になっていく。そのプロセスで知らないうちに専門職の責任感が育まれていく。目標を与えられて、それをどうにかしようということで、「どうにかする力」を発揮する。チームの目標を達成するときに「信頼される力」を発揮していく。先程の公式を一つにまとめると、チームへの貢献、これは「社会貢献力」になる。目標を共有し、共有したあとで、責任を分担し、一人一人が授業でやるべきことを授業の場「勝負の場」で出し切ることを繰り返すことで、「どうにかする力」がついていき、これが責任の遂行になり、相互信頼感が生まれる。全て、学校側が必修化しているものは、教育も組織も同じように動いている。

次に、社会への貢献で見る、これはピーター・ドラッカーのマネジメントの役割を応用して、「三方よし」の考え方を加味し考えている。まず、社会貢献主体としての沖縄尚学は、個々の生徒が自分も人も幸せにする人になる手段を身につける様々な場を提供し、強くて優しい文武両道のグローバル教養人の基礎を育む、遅い進学校だ。沖縄尚学が考える文武両道もグローバルだ。これが、普遍的な教育システムがあるということになる。そして、働く人、教職員が、自分の得意を活かし自分が幸せになり、周囲の人を安心させ、喜ばせ、幸せにする。これが、教職員の自己実現と社会貢献を実現する、自己啓発型進学校と呼んでいる。学校で言うと、お客さんは生徒で、我々が売る方になる。買う方もよし、売る方もよし、もう一つよし、先程のセルフマネジメントシステムで説明した社会だ。沖縄、日本、アジア、世界で、沖縄尚学があって良かったと思ってもらえる学校であることが大事で、グローバルな教育需要に答えられるかどうかで決まる。グローバル社会にあって良かったと思ってもらえる学校になるためである。

「現在の国際問題のほとんどは、国際的合意に基づいた拘束力のある法律が制定できれば、解決をする」と考えている。今現在ビジネスマンや、外交官は、無理というかもしれない、しかし、我々教育者は今ではなくて、10年後や20年後、50年後を想定して、今から努力できる。これは教育者の特権だ。

次に、「ルールは国際的拘束力を持てるのか」。今、大国はルールを破ってもだれも罰せられない、ところがスポーツは大国でも小国でも国際的ルールで罰せられる。ルールを作った人々が信頼され、各国で教育を通じてルールを遵守してゲームをする。ここから学べることは、グローバルに信頼される人間を育て、グローバルなルールを普及させるということで、我々教育がグローバルな需要に応えられる。沖縄尚学の答えは、グローバル教養人の作ったルールなら信頼して従うと考えている。沖縄尚学が考えるグローバル教養人は、まず、ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバル、例えば、沖縄のこと、日本、アジア、グローバル、どんな社会でどんな仕事に就いても、自分の強みを活かし、自己実現と社会貢献につとめる。もう一つは、ローカルからグローバルまで様々な問題の解決に努める。例えば、地球温暖化の問題では、沖縄を優先させるということはあるまい。やはり、地球全体を優先させて、沖縄は我慢するところを我慢しないとイケないと思えるのが、グローバル教養人の視点である。問題に応じて、どれを最優先させるかという判断ができるかどうかポイントだと思う。これを通して、多様性と統一性ある平和な社会に貢献するのが、グローバル教養人と考えている。

グローバル教養人は二つのグローバル基礎力「どうにかする力」と「信頼される力」を持っている、持とうとしている。グローバルシティズンの資質、世界中どこにいても大人と見られる資質。そして、四つの帰属意識が非常に大事な力で、例えば、私だと沖縄のため、日本のため、アジアのため、世界のためとなる。この帰属意識を持っていない人が決めると大変なことになる。グローバル基礎力と四つの帰属意識がないとグローバル教養人になるのは難しい。次は責任感、常にベストをつくしているか。それから、政治参加の意欲。これは、拘束力のあるルールを決めるのが政治と規定している。それに参加する方

法は投票するか、立候補するかである。それから批判的思考力、これは前提を疑う力。外国ではこれがない人はとても暮らしていけない。それから、差別はないかという公正をもとめる姿勢。そして教養、これは沖縄尚学では「知識と智恵と論理的思考力と批判的思考力」。それから倫理観、リテラシーとマスタリーの両方の文化力。自分の文化を身につけ、外国の文化が分かること。マルチカルチャーでなくモノカルチャーでルールを作ったら国際的には通用しない。帰属意識がなくて、ルールを作るととんでもないことになる。そして、言語力。そして、遊び、娯楽、息抜き、この三つは自由だ。沖縄尚学では教育環境のなかで、11の資質を育てていく。この資質のほとんどは意識するだけだ。もし、自分がこの行動をとったら、責任感はあるか、帰属意識があるか、と意識するだけで、それが当たり前になる。

沖縄尚学はグローバル社会の教育需要に応えるグローバル進学校、多様性と統一性のある平和な社会に貢献する教育機関を目指している。グローバル進学校は沖縄、日本、アジア、世界に対する帰属意識を持っていること、それから、日本だけでなく、グローバルに通用する価値を創造すること、例えば空手はグローバルな力を持っている。柔道であれ、なぎなたであれ、グローバルな価値を持っていると考えている。文武両道、これもグローバルな価値が非常に大きい。IBも同じだ。「どうにかする力」これにも価値があると思う。沖縄だけでなく、日本、アジア、世界から生徒が学びにくる学校、多様性の中の統一性を体験させる機会を作ろうとしている。多いときで300人くらい、少ないときで100人くらい、短期・中期・長期の外国からの留学生が来ている。世界中の学校に留学するシステムが在校生向けにある。世界に30校協定校があって、それらの学校と交換留学をしたりしている。ただ、大学が10校くらいあるので、そこには、進学をさせている。推薦入学で入れる形を取っている。日本は勿論、世界中の大学に、進学できるシステムがある。これももっと希望すれば進学できる態勢を作っている。日本は勿論、世界中の大学と海外の大学の両方を合格して選択させている。これまでも海外の大学に行かせているが、英語だけができて海外で活躍ができるかというところではない。日本語で教養、数学や社会や国語ができて、その上で英語ができるとほぼ大丈夫。ところが、英語だけで行ってしまうと非常に時間がかかる。

2007年に空手を始めたとき、今と違うのは皆白帯、3年目に3人が黒帯に取った。5年で50人黒帯が出たらお祝いして下さい、出ませんよと空手道連盟に言われたがやらせてみたら、子ども達は空手の先生が思っていた以上にやり、去年610名黒帯になった。それから、必修のボランティアで、老人ホームや幼稚園など世代が違うところに行っている。これからの日本は国が貧しくなってお年寄りの面倒を見られなくなる。我々のメンタリティーの中に社会のお年寄りの面倒を自分達が見るんだということをつくって行かないと、これは難しくなると考えている。

私は講演をいつも「行逢りば兄弟（いちゃりばちよーでえー）」という言葉でしめる。これは直訳すると、「Once we meet, we are all brothers and sisters.」。これを私は今回こう言いたい「Once we share a goal, we are all brothers and sisters.」。目標さえ共有できれば我々は皆兄弟。

〈質疑応答〉

Q：IBプログラムについて、日本で30校ほど実践しているところがあるようだが、先生の学校では、上手く行っているのか、どうなのか。先程の先生の講演の中で、先生が動いたり勉強したりして、チームになって、先生が教職員の組織ができていって、具体的な仕掛けとしてはどのようなものがあるか。

A：後者から、各学年に目標が設定されると、その目標から、一人一人の先生方の目標が設定できる。新人で余り体験のない先生は自分の目標を達成することが精一杯だけれども、段々慣れてくると、自分は1組と2組を見ているけれど、3組や4組は大丈夫かなとみるようになる。それを学年全体で見れるようになった目線は学年主任まで来ている。さらに、中学1年から他の学年まで見れると教務主任であり、教頭の目線になる。また、物事を判断するときの良い目標かどうか、今年の生徒はこういうレベルで1学期までにこういう成績を取らせようとする。そのときに、よくあるのは、現段階のレベルに合わせてどのくらい伸びるか想定してしまう。そして、今日40点だから60点目標にしようとする。そうすると、私が言うのは、「あなたこの目標を達成したときに学年主任は嬉しいと思う。教務主任は、私は。」ということ。良い目標は自分も嬉しいけど、周りも嬉しくない良い目標ではない。そうすると、自分が嬉しいだけじゃダメなんだなということに気がつく。そういう持っていく方が大事じゃないかなと思う。先生方は教育者なので、これは良いことですよね、というと、10人中9人は頑張る気持ちになる。

IBは他と比べてということは全く頭がない。よその学校が、どのようになっているのかわからない。IBをスタートする際、一人一人の先生は私が選んだ。何を基準にしたかということ、この人は見ていようが見ていなかろうがベストを尽くす姿勢があるかどうか。それに加え、各教科の専門性があるかどうか。この二つがあれば、あとは任せるよ、しっかりやってねと言うと、彼らはしっかり頑張ってくれる。運動部も基本的に同じで、野球の監督は理事長が任命した。監督は見ていないときにサボる可能性があるかと、いうと全くない。ベストを尽くし、手を抜くことはない。この人はしっかりと目標に価値を見出し、裏表無く、ベストを尽くそうとする姿勢があり、専門的な力があるかなということを見れば、大体は上手く行くと思っている。



●全体会の様子

Q：先程、空手をやる切っ掛けが色々あったと先生がおっしゃったが、一番大きな切っ掛けは何か。

A：私はアメリカに行って、日本史を教えていた。日本史を教えたのはラッキーだった。日本人が日本史を教えているので、アメリカ人が私のことを信頼する。ただ、間違っていたのは、私は英語さえできればOKだと思っていた。ところが、当たり前のことだが、アメリカは英語できても誰も尊敬しない。でも、授業をしたあるときに、白人の女子学生が、私のところに来て「私の祖父は船越義珍先生から空手を学び黒帯でした。父も私も黒帯です。私の夢は将来沖縄についてReal Karate（本物の空手）を学ぶことです。」と言った。そして大学の職員の先生方に聞いてみたら、驚いたことに皆が知っていた。「Karate originate in Okinawa.」。しかも、空手はただのmartial artsではなく、Karate masterは人格者のようなイメージがある。それで、色々見てみるとうちの生徒が文化交流で龍舞を披露すると海外の生徒はほとんど見ない、三線で歌を歌っても、あまり聞かない。ところが、黒帯が三人立って形をはじめたとたんフリーズする。これは文化力がすごいと気がついた。理屈抜きで価値を受け入れさせる力がある。それが切っ掛けで、アメリカから戻ってすぐに理事長に相談して、やれということになって、空手道連盟に行って会長・理事長と話しをした。私は、空手のことは何も分からない。だから、流派も送る先生も連盟で決めて下さい、それで結構ですから、ということで決めて頂いたのが今のスタッフだ。送られてきた先生が、最初はおじいちゃん達がきたので、定年退職した人が来たんだろうなと思ったら、とんでもない、各流派のトップの人達を揃えてくれた。子ども達も最初は文句を言うが、一流を見たら分かる。子ども達は自分がどんなに頑張ってもこの先生方に勝てるわけないと思っている。生徒も空手の先生に「こっちい」と言われると行く。空手の先生方も始めて1週間くらいしたときは「あのやる気のない連中にどうやって空手を教えるんですか」と言っていた。「先生方の道場に来る子はやる気まんまんですよね。こちらは教育でやる気のない子どもをどうやってやる気にさせるか、それが勝負ですよ。とにかく一緒にやりましょう」ということで、色々やった。映画『Best Kid』を見せたり、話しの上手い人が早稲田の大学院にいたので呼んで空手の歴史などを話してもらったりした。ところが、これは杞憂でした。生徒達がこの人達本物だなと気がついて、3ヶ月くらいで落ち着いた。空手の先生に聞くと「3ヶ月なんてとんでもない、1年かかりましたよ」と言うけれど、子ども達は必死になってやる。だから、まわってきたのではないか。名城理事長：参加者の先生方に質問させて欲しい。先生方の学校はずっと順調にきているのでしょうか、それとも危機的な状況を体験したのでしょうか。あるいは、廃校の直前から立ち上がった学校があるのでしょうか。私が、この沖縄高校を引き受けたときは、先生方は受験指導しているが、先生70名の給料がない。灯りも一つもない。給料がないのは大変だ。ボーナスも出ない。そういう学校を引き受けた。実績もない。1万人で国立大学1人しかいない。そこから今ここまで来た。奇跡のような感じがする。尚学院から職員を入れて、職員も皆頑張ってくれた。私についてきてくれた。私の考えでは、教育は究極的には人間をつくらぬといけぬ。親近感と風格を感じさせる存在になって欲しいといつも頑張ってきた。今後もそのつもりで頑張りたい。

ネットワーキングパーティー

参加者に視察校の名城政一郎・副理事長が加わり、次世代リーダー・現職リーダーらによる教育懇談会が行われた。中川武夫所長（写真左）の開会挨拶、名城政一郎・学校法人尚学学園副理事長による挨拶（写真中段左）、次世代リーダーによる乾杯（写真中段右）後、参加者は名刺を交換し、親密な雰囲気の中、腹を割って話し合い、情報を交換し、交流を深めた。木内秀樹専門委員長（写真下段右）は参加者にエールを送り研修会を締めくくった。非常に充実した会となった。



～参加者からよせられた声～

問1 本研修会への参加の主目的

- ◇管理職の交代に伴うネットワーク作り。
- ◇次世代リーダーとして自己研鑽、課題の発見と解決の方策を探る。
- ◇新しい時代を見据えた「学校改革」の真っ最中であり、是非参考にしたいと思い参加した。
- ◇沖縄尚学高等学校、同附属中学校視察のため。

問2 本研修会のプログラム・内容等について

〈講話〉

- ◇改めて私学とは何か、中等教育の役割とは何かを考える大切さを実感した。吉田先生をはじめ、私学のために闘っておられる先生方の思いを共有しつつ、自分の学校で、生徒のためにベストを尽くすことが、まず、できることかと思った。
- ◇私学全体の視点を持つ重要性を再認識した。
- ◇教育行政に関する最新のトピックにふれることができ関心が向上した。
- ◇吉田先生から現在の私学を取り巻く状況・課題が提言され、特に高大接続改革について実態を把握する必要性を改めて感じた。

〈講演Ⅰ〉

- ◇追従主義ではダメ！冒頭から喝を入れて頂き、学校改革の沢山のヒントを頂戴した。現在、本校ではICT化が最大の課題だ。オーソドックスな学校に甘んじている現状を何とか変革させたいと強く思った。
- ◇国際教育・異文化体験など、オプション行事以外の取り組みを考えてる時期で、大変参考になった。留学生の受け入れ態勢については、先生のおっしゃっている通りだと思う。
- ◇ショックであった。言語教育は付録的に考えていた部分があった。中高でどのように取り組んでいくのかを今後真剣に考えたい。
- ◇今、私が構想している教育内容作りにぴったりの内容だった。またお話を聞きたいと思った。

〈学校視察〉

- ◇生徒が礼儀正しく挨拶している姿が印象的であった。空手を何故やっているのかを聞いて良かった。
- ◇空手とIBの授業を見せて頂いたが、どの生徒も自分達が何をやっているのか、どうしてやっているのかを理解して授業に臨んでいる様子が伝わり感動した。
- ◇とてもよくマネジメントされていて。学園全体に一体感があり、バランスのとれた教育がなされていた。
- ◇IB校としてのみならず、多くの点で参考にできることを見つけることができた。お出迎えなど、ホスピタリティーの高さを感じた。

〈講演Ⅱ〉

- ◇強い信念、ぶれない信念を感じた。そして、それこそが私学の本質だと思った。また、分析力に感服した。子どもと教員が一緒になって信頼される力と社会貢献力を伸ばしている姿に感動した。
- ◇様々な取り組みを活かすための8コース生なのだと分かった。よく考えられて学校を運営されていることがうらやましい。先生方も素晴らしい人材が集まっているのだろうと推察される。
- ◇自己実現と社会貢献を核とした普遍的な教育システム、特に組織に属するセルフマネジメントシステムが非常に興味深かった。
- ◇沖縄尚学さんの教育に対する考え方がよく理解できた。チーム養成について参考になった。

〈パワーランチ、ネットワーキングパーティ〉

- ◇他校の状況をお聞きすることができて、楽しい時間を過ごせた。
- ◇名刺交換をすることで、大変充実した話が聞け、また、情報のやりとりができて、良かった。
- ◇気軽な雰囲気意見交換ができて良い時間となった。
- ◇名刺交換ができ、全国の私学の関係者と知り合いになり有意義であった。
- ◇多くの先生がとお話しできて良かった。

〈その他・全般〉

- ◇大変充実した会であった。
- ◇プログラムがとてもよく組み立てられており、効果的に研修できた。

◇充実した内容で1日があっという間に過ぎていった。

問3 最も重要視（又は直面）する喫緊の課題・関心事、その選択理由・具体例

1「私学経営、学校運営」

◇変革の時代、10年後、20年後、30年後に向けて経営を考える必要があるため。

◇組織改革が課題のため。

4「生徒募集、公立の私学化、特色教育」

◇少子化が進む中、生徒の確保が困難となることが予想されるが、特色ある教育、魅力ある学園とするために、今何をすべきか。

問4 来年度以降の当研修会、日私教研の研修事業に対する要望等

◇生徒の質を変えるための策とは、学校が良くなるために生徒・教員の具体的な取り組みについて。又、保護者の気持ちを動かせ、理解・協力を求めるための策について。

◇今回の様に独自性が高い（強い）学校での研修を希望している。

◇評価について（ループリック・思考コード）

◆ 講師・指導員（順不同）◆

諸見里 明 沖縄県私立中学高等学校協会副会長
 名城 政次郎 学校法人尚学学園理事長・沖縄尚学高等学校校長
 名城 政一郎 学校法人尚学学園副理事長・沖縄尚学高等学校附属中学校校長
 吉田 晋 富士見丘中学高等学校 理事長・校長
 平方 邦行 工学院大学附属中学高等学校校長
 中川 武夫 蒲田女子高等学校 顧問

◆ 専門委員・指導員（順不同）◆

木内 秀樹 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長
 近藤 彰郎 八雲学園中学高等学校 理事長・校長
 森 涼 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校 理事長・校長
 徳野 光博 学校法人東福岡学園（東福岡白雲館中学校・東福岡高等学校） 理事長
 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長

◆ 都道府県別参加者数◆

No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数
1	北海道	-	17	石川	-	33	岡山	-
2	青森	-	18	福井	-	34	広島	1
3	岩手	-	19	山梨	-	35	山口	-
4	宮城	2	20	長野	-	36	徳島	-
5	秋田	-	21	岐阜	-	37	香川	1
6	山形	-	22	静岡	1	38	愛媛	-
7	福島	-	23	愛知	1	39	高知	-
8	新潟	-	24	三重	-	40	福岡	6
9	茨城	-	25	滋賀	-	41	佐賀	-
10	栃木	-	26	京都	1	42	長崎	-
11	群馬	-	27	大阪	5	43	熊本	-
12	埼玉	-	28	兵庫	-	44	大分	1
13	千葉	1	29	奈良	-	45	宮崎	-
14	神奈川	2	30	和歌山	-	46	鹿児島	2
15	東京	10	31	鳥取	1	47	沖縄	3
16	富山	-	32	島根	-			
						計	15都府県	38